



■文：太田哲也

**ダン・ウエルドン**の件については素通りしようと考えていた。その気になればクルマ雑誌の連載コラムやウェブなどで書くべき題材ではある。それなのにそうしなかったのは僕の心が弱いからなのだろう。ホリデーオート以外のどの編集担当もこの件に触れてこなかった。重要だが避けて通り過ぎたくなるテーマというところもあるだろう。でもどうせ書くなら「二度とこのような悲惨な出来事はあってはならない」的なうわべの評論とはしたくない。「モータースポーツの安全性とリスクについて」。裏を返せば「危険と死について」。近代社会では触れることがタブー視されがちなテーマについて、本音で語ってみようと思う。

**安全改善策は大切だが  
レースの否定は違う**

2011年10月にラスベガスで行われたインディカーシリーズの最終戦で多重クラッシュが発生、ダン・ウエルドン選手が亡

アメリカンモータースポーツの最高峰「インディカーレース」で、残念なことに多重クラッシュによる死亡事故が発生した。この計報を聞いて、大きな事故の経験を持つ太田はどう感じたのだろうか。モータースポーツの安全性とリスクについて、改めて考えてみた。

**いつもそばに  
クルマが。**

くなった。インディ500を2度制し、05年にはシリーズチャンピオンにも輝いた33歳だった。事故は11周目、34台中15台が絡む大クラッシュの中で起きた。ダン・ウエルドンは混乱を避けられず前車に乗り上げた。時速370km、オーバル(楕円)コース、他のクルマとは数cmしか離れていない超接近高速バトル。むき出しのタイヤ同士が接触すると後ろのクルマは簡単に

宙を舞う。オーバルコースはリスクが高い。コースサイドはコンクリートウォールで安全地帯はない。しかもコーナーリング速度が高いから、挙動が乱れた時は対処する間もなくウォールに衝突する危険性が高い。僕も一度オーバルでレースをやったことがあるが、ドライバーはロードコースとは全く違う

思考回路となる。

ロードコースはコースサイドに縁石がありその先にもグリッド(安全地帯)があるので、攻め過ぎて縁石をまたげばタイムが遅くなる。ところがオーバルの場合はぎりぎりまで行けばいくほどタイムアップする。なのでドライバーはリスクを削る誘惑に常に駆られている。

この事故を受けてインディカーレースそのものの安全性を追求する声が上がっている。悲劇を繰り返してはならないし、真実を明らかにして改善策が検討されることを期待する。個人的にはオープンボディに戦闘機のようなフルカウル装着はどうかと思う。

ただ、改善は大切だが、レースそのものの否定につながる意見が蔓延することを僕は心配する。悲しい事故だが、だからと言ってインディカーレースは止めた方がよいという(とくにF1関係者から聞こえてくる)ニユアンスの意見には反対だ。確かにリスクの高いレースで

危険度は世界一、二だろう。そこに異論を唱えるドライバーはいまい。でもダン・ウエルドン自身もそれは承知の上で、少数のトップドライバー以外、大金を持参しなくてはならないF1やその他のレースよりもプロとして稼げるレースを選んだのだろう。そんな彼のプロ意識に僕は共感するのだ。

**本当のスポーツは登山と闘牛とモータースポーツ**

ヘミングウェイの言葉(違うという意見もあるが)として「本当のスポーツは、登山と闘牛とモータースポーツである。ほかはお遊びに過ぎない」とある。真偽のほどは定かでないが、いかにもヘミングウェイが言いそうではある。

批判を恐れずに言えば、人間には、(もし彼自身が望むなら)危険なことを行う自由がある。死と隣り合わせた時に訪れる至福の一瞬。それを味わう権利がある。

今まで僕も死んでもおかしくないことが何度かあった。レーシングカーで後ろを向いて宙に浮いた。300km/hでブレーキが効かなくなった。事なきを得て恐怖が通り過ぎた時、生きている喜びを大きく実感した。すべての事象に表と裏がある。



恐怖と安堵。悲しみと喜び。人間の感情は対なのだ。不幸を経験しないで本当の幸福は掴めないものなのだ。

危険を承知でも立ち向かう勇氣、それが人類の発展にも貢献してきた。感動も呼んできた。だからこそモータースポーツは真のスポーツなのだ。

あえて立ち向かっていくからこそ人は感動するのだ。僕の友人にも、モータースポーツで事故にあつて障害を負つたのにレースに戻る者たちがいる。青木拓磨選手も伊藤真一選手もそうだ。あんな目に遭つたのにまた戻ってくる。

F3レースで下半身不随となつた長屋宏和選手もカートレースに復活をかけた。その時、彼のお母さんから聞いた。

「息子がまた事故に遭つリスクよりも、この障害をきつかけにチャレンジしなくなつてしまう人生を選ぶことを恐れているのです。何かに立ち向かつていく氣持を大切にしたい」

F1関係者のインタビューからは、インディは経験の浅いドライバーも走っている（つまりF1の方が上だ）というニュアンスが伝わってくる。でも勇氣に関してはインディドライバーのほうが上だろう。インディは僕だったら怯んでしまつた。昔

## 危険を承知でも立ち向かう勇氣、それが“感動”を呼んできた。だからこそモータースポーツは真のスポーツなのだ。



▲イギリス出身のダン・ウェルドン選手は、2002年からインディカー・シリーズに挑戦し、2005年にはインディ500での勝利を含む6勝を挙げてチャンピオンを獲得。写真は2011年のインディ500での2度目の優勝をしたときのもの。享年33歳。ご冥福をお祈りします

マネジメント会社から出場を提案されたことがあるが、「俺はぐるぐる回るのは好きではないので…」と誤魔化した。僕には耐



▲10月16日、ラスベガス・モーター・スピードウェイで開催されたインディカー・シリーズの最終戦。11周目に15台がからも多重アクシデントが発生したが、これにダン・ウェルドン選手が巻き込まれて帰らぬ人となった。このアクシデントを受け、レースはキャンセルとなった

■写真提供：共同通信社

久レースの方があつている。ダン・ウェルドンは自分の命よりもプライドを大事にするタイプの人間だろう。彼は単に「悲劇の人」とは報道されたくないだろう。彼のような勇者の勇氣が人類の発展に貢献してきたのであり、その勇氣に敬意を表すべきだろう。

### プロとアマには意識の違いがあるべき

とは言え、モータースポーツに命がけで挑むべきと言っているのではない。むしろその逆で、とくにプロでない限り絶対に一か八かは慎むべきだし、怪我も絶対に避けるべきだ。僕はと言うと、今の僕の意識なら絶対的に安全だと思つて走っている。なぜなら今の僕はアマチュアとしてモータースポーツに取り組んでいるからだ。

20年近くレースをやつてきて、これは危険が迫つていくという時はわかるものである。あの事故の時も（改修前の富士スピードウェイで）この雨の量でレースができる状態ではないと思つていた。でもレースがスタートするなら、プロとして出ないわけにはいかなかった。コースに出たらアクセルを踏まなければならな

つた。あの霧の中でひとりだけ緩めたら追突されてしまっただろう。

でも今はアマチュアだからアクセルを緩める権利がある。だから今はもう絶対に事故に合わない。そう思っているから、現在はいくつこう気楽にレースに出られるのだ。

こうして身体が良くなつてくると、また自然とレースに気持ちがかうものだ。プロとしてレースをやつていたときは「レースが楽しい」とは思わなかったが、今は楽しいと思えるようになった。今後は、安全面を含めたモータースポーツ振興とクルマ文化発展に貢献したいと考えている。

そしてダン・ウェルドンの死も無駄にしないよう、モータースポーツの安全性と振興に取り組みたいと思う。



▲モータースポーツにおいて事故はどうしても避けられないが、その被害を最小限にしたり、事故自体を減らしていくことは可能はず。今回の事故も真相を究明し、今後に生かされることを望みます

●12/18(日)太田哲也×ホリデーオートTetsuya Ota ENJOY&SAFETY DRIVING LESSON supported by出光&スパタイGP詳細はP206をご覧ください。 ●11/27(日)アルファロメオチャレンジ東北シリーズ第二戦（管生）にKOR&TRCメンバーが参戦予定。お問い合わせは045-948-5535まで。 ●ニッポン放送「情報発見 ココだけ！」内（19時台）に月～金まで10分間、隔週にて太田哲也が出演しています。